

Title	思春期心性の問題点(2) : 非行について
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 46 p.65-p.80
Issue Date	1980-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80764
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

思春期心性の問題点 (2)

—非行について—

氏 原 寛

Some Psychological Problems of Adolescence (2)

—On Delinquency—

Hiroshi UJIHARA

The author tries to grasp delinquency as an unavoidable task in the process of inner psychic development. He, of course, admits the important effects of environmental factors on delinquency. But delinquency, he thinks, comes as anti-social acting out when inner conflicts are projected on the outer world. So, he presents a case report to discuss concretely the above hypothesis.

1. はじめに

思春期ないし青年期が、いろんな意味で動揺の多い時期であることは、諸家の指摘するところである。その表われ方も千差万別であるが、昨年度はそのうち登校拒否の心理的機制について若干の考察を試みた（氏原 1979）。本年は非行について考えることにする。ただし、多くの非行理論（ヒーリー 1974、平尾 1979、遠藤 1978、我妻 1978、黒川 1978）がのべるような、いわゆる環境的要因についてはここではとりあげない。非行現象を、もっぱら心的な内的プロセスとの関わりにおいてみるためである。もちろん、こういうみ方は前述の環境論と矛盾しない。それらが、非行の本来的にもつ思春期性と犯罪心理学との統合に必ずしも成功していないためか、叙述がやや平板な印象を与えるのはとも角として、むしろ相補的な関係に立つものである。

2. 思春期心性について

思春期ないし青年期の特長を何によって捉えるかは難しい。しかし本論では、それを「自我のめざめ」に絞って考察する。もっともこのことば自体かなり多義的であるから、論を進める

前に、若干の考察が必要である。

本論では、自我のめざめを自他の分化として考えることにする。それは必然的に、思春期前の比較的未分化な自他の関係を前提としている。だから、おとなになるプロセスには、今まで一体であった自分と世界とが分離する、という一面が含まれている。いずれそれは再び統合されるのであるが、この分離と統合のプロセスにつまずいた時、さまざまな思春期障害が発現するのであろう。もっとも、分離といい統合といってもいろんな段階があるらしく、たとえば未開人と文明人とでは、かなりのズレのあることは考えておかねばならない。

ところで、自他の分化が生じるとどのような結果が予想されるのであろうか。自他未分化な状態とは、世界と自分とがいわばセットになって一つに組みこまれ、お互いに独立したバラバラで具体的な空間と時間のつながり、として考えられる。ここで主体性の発現する余地はなく、それは閉じこめられた、又はまだ目覚めていない状態、といえよう。それが崩れるのである。シュタール（シュプランガー 1977）は、ある時一本の梨の木の下を歩いている時、突然、「帰りには今感じている喜びはすべて失われているだろう」という内心の声を聞いたという。それは、今見ている自分や見られている梨が、いつまでもそのままではありえないという相対的客観的な認識の始まりである。それは、主体が場面への捉われから解放されると同時に、個々の具体的絶対的場面の相対性に気づくことであり、その結果、とにも角にも纏っていた既知の世界のバラバラさが見えるようになり、それらをあらためて全体的な意味関連の中に捉えなおさねばならぬことを意味している。

したがってそれは、一面解放的で自由な力の意識をもたらすけれども、他方、新たに開けた漠とした世界に投げ出され、どうしてよいか判らぬ無力感を伴う経験でもある。つまり、客体としての相対的な世界に主体としてどうかかわるかということは、今までのような単に受け身のありようから、積極的能動的な存在への転換を意味している。しかし、未分化とはいえ今までの世界との一体感のつながりの失われたこと、あらためて認識する世界の圧倒的な大きさや不可解性が、逆に子どもたちに無力感や絶望感を引き起こすわけである。

それらの経験は、今まで自明であった既知の世界が、あらためて未知のものとしてたち現われてくるとでもいえようか。青年期は、それらを再び既知の世界に組み入れる、むしろ、それらに基づいて既知の世界を創り上げる時期なのだ、といえるかもしれない。

しかし個々の経験自体についていえば、いずれも今までに馴れ親しんだものである。それにもかかわらずそれが未知のものとして現われてくるのは、「いま、ここ」の現実の経験が、決してそれ自体で完結するものではなく、もっと広い時間的空間的背景を担うものであること、そのような背景について主体がほとんど知らぬことに気づくこと、から来ている。だからこの時期の経験は、新しいものが現われて新しい世界を形作る——それならば驚きは驚きであるにしても、この時期に特長的な裏切られたような感じは起こりえない——のではなく、今まで通りの世界がまったく新しい相貌を呈してくるものであるだけに、かえって不気味なのである。

それを世界における他者性（小出 1978）の開示と呼ぶことができるかもしれない。

さらにこの傾向に拍車をかけるものとして、先にあげたシュタールの例の示すように、今まではくり近し可能であった経験が、まさしく一回限りの「いま、ここ」のものとして認識されることがあげられよう。シュプラングー（1977）によれば、子どもはその両親がいつまでも変わらず、もちろん死ぬことなどありはしない、と思っているらしい。だから、今のままの両親といつでも会うことが可能なわけである。しかし、「いま、ここ」の経験が文字通り「いま、ここ」だけのものになると、その印象は強烈になる。たとえば、何かの理由で死を覚悟した人たちは、今まで気づかなかった一木一草のたたずまいや、夕焼け雲の鮮やかさにしばしば驚かされるという（小此木 1979）。

それが一種のはかなさ又はやるせなさを伴いながら、だからこそ、まったく新しい印象をもつてたち現われてくるのであろう。自我のめざめが、しばしば外界の開けとして経験されるゆえんである。それらは、馴れ親しんだ対象であるだけに、ある場合には異様に生々しい印象をもつけれども、世界とのつながりの失われていない限り、生き生きとした生命感に満ちた経験のようである（西村 1978）。そしてこのような自我体験が、概して突然に生ずる——つまり意図的にコントロールすることができない——らしいことは、それがかなりの程度必然的な自然のプロセスであることを思わせる。もちろん外界の対象そのものが変わるはずはないのだから、これらはすべて主体の側の内的な変化によっている。ということは今までのべた外界の開けが、そのまま内界の変化に対応している、ということである。

これは一つには、客体としての外界の中に、主体である自分自身も含まれていることによる。だから自我体験とは、内なる外界ないしはおのれの中の他者性に気づくことに他ならない。それを内界の開けということもできよう。その結果、今まで自明の存在であった自分自身が、見る自分と見られる自分とに分離する。そして、見られるものが見るものとのかわりを越えて突出してくる時、いわゆる相貌的知覚が生じ、見るものが見られるものとのつながりを失うと、離人体験が生ずるのではないか。思春期障害の多くが、いわゆるわが肉体との出会い（笠原 1977）を契機として発症するというのも、この分離が、精神と肉体とのかい離として現われるから、と考えると理解しやすい。たしかに肉体は、ある意味では精神を閉じこめる器であるけれども、又、肉体を通してしか精神は、おのれを実現することができないのだからである。そして、このような肉体性をも含めて、あらためて自分自身を何者であるのか確認し再統合することが、思春期から青年期にかけての課題となる。それは、失われた世界の自明性を回復するために、自ら世界を意味づける試みに他ならない。

以上のべてきたことを、意識、無意識ということばでいえば、思春期とは、意識のレベルがだんだん発達してきて、無意識の見え始める時期、ということができる。そして、この無意識を意識の世界にどう取りこむかが、この時期の課題なのである。この時期の若者たちの外的状況の認識は、そうした内的状況の外界への投影であることが多い。そしてそのことが、非行間

題を考える際、今まで比較の見落されてきたのではないか、と思う。

もともと意識は無意識から生じたものである。そして、意識が無意識のすべてを意識化することはありえない。だから意識はたえず無意識にとり囲まれているわけで、その意味では、意識することは無意識の存在に気づくことに他ならない。だから意識的世界とは、既知でなじみ深い、そこではどうあるべきかの判っている、いわば“われらの世界”なのであるが、それはつねに未知のあやかしの世界としての無意識と、境を接しているわけである。そして意識が、そのようなあやかしの世界の圧倒的な広がりをする時、せつ角のわれらの世界が、再び呑みこまれそうな不安を禁ずることができない。この不安がそのまま現実世界に投射されると、社会的要請に応えるべき主体としてのおのれの無力さが、あらためて痛感されることになる。

すでにのべたように、主体性に自ざめるとは、みずからの相対性を自覚することであるが、それがいやおうなく他者との比較を促して、そこで子どもがつまずいた場合、しばしば不登校現象の生じやすいことは、昨年検討した（氏原 1979）通りである。こういう場合、のり越えられるべき障害が、子どもの能力から考えて客観的にはそれ程でもないのに、子どものたじろぐのは、圧倒的な無意識の力が、現実の対象に投射されているからに他ならない。

同じようなことは、この時期の子どもたちの母親に対する態度にも現われる。無意識がしばしば母性ないし女性々として感じられることを指摘したのは Neumann (1973) であった。自我に目ざめる、したがって意識の世界を広げることは、こうしてしばしば女性的な怪物と戦う英雄としてイメージ化される。しかし、それが現実の母親に投影されると、母親そのものは平均的な母親であるのに、子どもにはおのれを呑みこもうとする悪しき怪獣としか映らないことがある。非行にしろ何にしろ、不適応の原因として親子関係の歪みのうんぬんされることは多いけれども、以上のべたように、それが子どもの内的発展に必然的な心的プロセスの、外界への投射である場合が少なくない。ひと頃、不登校の原因として、学校ないし教師に母親イメージが投影されるという意見（Suttenfield, 1954, Waldfogel 1957）の主張されたことがあるけれども、母親イメージを現実の母親のそれではなく、無意識的なものと読み代えると、納得できる考え方である。

はじめにのべたように、思春期とは背景の見えてくる時期なのだから、今まで明瞭で親しみ深かったものが、急にわけの判らぬ様相を見せることがある。こういう場合子どもたちは、既知の世界を強迫的に整理することによって、操作可能なわれらの世界を維持しようとし、それが完全主義癖として現われたり、相貌的なものの侵入がそれで防ぎきれぬ場合は、対人恐怖的な症状を発症させることが多いように思われる。不登校の始まりが、今までのやり方では処理できぬ事件——その際子どもたちは強い無力感に捉われる——をきっかけとしていることの多いゆえんであろう。

いずれにしろ、無意識の世界を否定的なものとして捉える限り、意識の世界の安定することはない。いわゆる伝統的社会の人々は、それについて深い洞察をもっているようである（岩田

1979) が、ほとんどの現代人は、そうした水々しい感覚を失ってしまった。その結果、思春期の問題としては、不登校現象に限らずさまざまな不適応が生ずる。これはたとえば、近代科学の進歩が人間の寿命を著しく延ばしたにもかかわらず、ついに死ぬことを克服しえていないことによく似ている。生きるとは死ぬことであるし、現代の孤独感の大部分は、人々がいかに生きるかにかのみ腐心していることに由来する。死は生の否定であり怖るべきものには違いないにしても、われわれにできることは、それをうけ入れることでしかない。強迫的な死の否定こそすでに生の否定である。いかに死ぬかに思い至ってはじめて生きる意味が顕われる。まったく同じことが、意識と無意識との関係についてもいうことができるのであり、無意識とのつながりが、時に意識の世界に不安をもたらすことは避けられないにしても、無意識とのかかわりを失っては、意識の世界は石化する (von Franz 1974) よりない。そこで世界は、質的な深味を失って単に量的で平板なくり返しの次元に墮してしまう (高橋 1977)。それと共に、世界との一体感も失われてしまうのである。

つまり思春期以後、無意識の存在に気づいた以上、われわれが不安を免れることはない。しかし、その不安を怖れる余り無意識とのかかわりを拒否すると、世界とのつながりが切れてしまうのである。もともと思春期とは、未分化ではあったにしろ今までの世界との一体感、の失われる時期であることはすでにのべた。だからこそ、意識の世界を無限に拡大することにより、今までのもっぱら受け身の状態から、主体的能動的に自らの世界を新たに創り出そうとするのである。無意識ないし母親的なものを倒し、人々を救って新しい国を建てる英雄の出現する時 (von Franz 1972) なのである。しかし、そこで英雄の手に入れる財宝はしばしば若い女性であり、それはあらためて世界とのつながりを確認することを意味している。英雄は大地を拓くけれども、いつか自分が大地に帰ることが予感されている。こうした大地とのひそかなつながりを感じることがなければ、大地にたち向うことはできないし、ましてや新しい世界を創造することなど思いもよらない。なぜならくり返くのべたように、主体としての自覚は自らの相対性に気づくことであり、その限り新たに開けた混沌の世界の大きさに比べると、おのれの無力さを思い知るよりないことが多いからである。

さてここで非行についていえば、今までの親しみやすい自明の世界が、急に近寄り難い相貌を示し始めたことに対する幼児的な怒りないし拗ね、として考えることができようか。好むと好まざるにかかわらず、若者たちは混沌の中から自分自身の世界を創らなければならない。そこで前述の無力感は、外的には今までの比較のない甘やかしの世界——いわゆる母性的世界——から、いきなり相対的な厳しい比較の世界——父性的世界——に投げ出された衝撃として体験される。その結果、ある程度対人恐怖的な傾向の生ずるのは避けられないが、同時に、多かれ少なかれ英雄的な自己主張的な動きが現われる。これがいわゆる第2反抗期である。

思春期に問題を露わす子どもたちに第1反抗期がなかった、という報告 (平井 1978など) は少なくない。子どもがある程度成長すると、単に外界に自分を合わせるということから、外界

を何とか自分に合わせようとする動きが現われる。しかしそのような自己主張的態度は、しばしば外界の要求と一致しないから、当然外からの反撥を招くことになる。そうしたくり返しの後に子どもたちは、どの程度又どのように自分を主張しかつ外界の期待に応えるべきかについて、一種のコツのようなものをのみこんでゆく。だから、こういう子どもが思春期に達して内的な高まりを覚えても、周囲との極端な摩擦をひき起こすこともなく、適当にやってゆけるのである。しかし反抗期のなかった子どもたちは、概して周囲に合わすことによって“よい子”であった子どもたちであるために、内的な高まりがいやおうなしに突出してくる時、それを適切に処理することに馴れていない。そのため、抑圧するにしろ表出するにしろ極端な形をとりやすいのである。

そこで第2反抗期の問題に戻ると、この時期の自己主張が、今までのもっぱら受動的な存在から、能動的な主体として自らを自覚すると共に現われることについては、すでにのべた。又、それが、内的な無意識の世界に対する意識的態度の外界への投射、という一面をもつことについてものべたつもりである。ここで若者たちは、圧倒的な内界および外界に対して、主体としての自らの力を試してみる必要がある。そして主体として、そのような内的外的の客体的世界と折りあいをつけなければならない。それがこの時期、多かれ少なかれ *acting out* の避けられない理由である。だから非行傾向は、この時期の子どもたちすべてのもの、と考えなければならない。世界に対する自己主張の試みが、ある程度反社会的傾向をおびるのは当然だからである。

しかし、ここで若者たちが世界との基本的なつながりを感じているか否かが、決定的に重要なのである。独力でたち向うには、外的な力は余りに大きい。多くの場合、ここで世界とのつながりがひそかに求められる。そしてそれは、現実の親子関係の再検討という形をとることが多いのである。後でもふれることであるが、どういうわけかわれわれは、親とのつながりを世界とのつながりにダブらせて感ずる傾向があるらしい。だからそこに何らかの歪みが見出されると、意識すると否とを問わず、子どもの関心はそこに集中する。しかも本来この問題は、内的成長に伴う必然のプロセスであり、その限り親がまともであろうとなかろうと、一様に否定的な姿で見直されることが少なくない。又まったく歪みのない親子関係などありえないから——そうした関係が必ずしも望ましいかどうかは疑問である——その気になって探せば、客観的に親の悪しき側面を見つけるのは比較的容易である。それにもかかわらず、子どもたちは、親とのかかわりを通して、あらためて浮かび上ってきた無意識的なものが、本当に自分にとってポジティブなものかどうかを確かめなければならない。だから、くり返し親から離反し、それでも親が自分を見捨てないかどうか、といった試しとなってそれが現われることが多い。

それがいつどのような形でおさまるのか、は難しい問題である。親としては、ただ待つより辛い時期、ということになる。ここで親に見捨てられると、求めているのは実の親ではなく、内なる親、つまり無意識ないしその投影としての世界なのだから、よほどの場合を除いて

子どもたちは現実には代りの親を求めざるをえない。もともとそれは、「より大いなるもの」とのつながりを求めているのだから、時には何らかの宗教的体験として解決の方向を見出すかもしれない。特定のイデオロギー集団に所属するのも同じ理由からである。それが非行集団である場合には、反社会的傾向をおびた行動化がくり返されることになる。

以上のべてきたことを要約すると、多かれ少かれ思春期の若者たちが、世界とのかい離に悩むことは避けられない。しかし、それが比較的一過的に終るものと、現実の親子関係を徹底的に確かめてゆかねばならない場合とがあるようである。おそらくそれは、思春期以前の未分化な世界との一体感の性質に由来するものであろう。その意味では環境的要因の重要性を無視することはできない。しかし本論では、より巨視的に、いわゆる青少年非行の背後にある内的構造について考察したわけである。

以下に一つの事例をとりあげて、以上のべてきた所をより具体的に検討したい。

3. 事例の概要

このケースの少年は、中学1年の2学期頃から、すぐカッとなって暴力をふるうので級友から怖れられるようになった。担任が注意すると、「すみません。これから気をつけます」と謝まるが一向におさまらず、少し強く注意すると翌日は休む、ということのくり返しであった。2年になると、学級内で金銭の盗難が続き、友人たちから白い目で見られるようになった。時には友人を脅して金品を強要するので、今までつき合っていた友人さえ離れるようになった。2学期に、生徒指導担当の教官から長時間にわたって注意をうけ、翌日からまったく登校しなくなった。学年からの依頼で学校カウンセラーが本人と接触を始めることになるが、始めて子どもに会うまでに2か月を要した。

祖父母に子どもがなかったために、父を養子にとった。父は会社員。母とは職場結婚で本人を頭に弟(小5)と妹(小3)が一人ずつ。しかし祖父母と父母の折りあいが悪く、本人が小学校高学年(学年不詳)のおり、同じ市内で別居することになった。その際、幼少時から祖母になついていたという理由で、本人だけ祖父母のもとに残された。その後祖父母は、今まで住んでいた家売り隣接市に移転。9月中旬から、授業終了後カウンセラーは何度か祖父母宅を訪問するが、内部に人の気配があるのに呼び鈴を押しても誰も出ず、10月になって始めて祖父母に会えた。しかし本人は「出ない」と言い合うことができない。「孫をここまで追いこんだのは学校の責任。早く学校へ行くようにしてくれ」と一方的に言われる。毎週水曜日の午後4時半頃訪問することを本人に伝えてくれるよう依頼。両親に知らせるかどうかという質問には、「知らせると大ゲンカになる。それにこれは家庭内の問題だから口出し無用」ということであった。しかし11月半ばになると、「よく来られますね。それにしてもあの子はなぜ会わないのだろう」と祖父母の態度が軟化してくる。しかし本人は依然として会おうとしない。『先生に用はない』と怒るのでしょうがありません」と祖母。「必ず会ってくれる時が来る」と励ます。

級友の話では、時々街に出かけている、夜遅く町内をぶらついている、とのことである。次回祖母が「本人は会いたくないと言ってます」と言うのを、強引に部屋まで押しかけてゆくとマンガを読んでいる。30分程一緒にいる。その間本人は何も言わない。「また来るよ」と言い残して帰る。このような沈黙の面接が数回続き、12月中旬、意図的に折り紙をもって部屋に入る。紙ヒコーキを飛ばすとその一つが彼の方に飛んでゆく。彼が投げ返す。次にカラスを折る。じっと見ているので「どうかな、折ってみないか」と誘うと手を出す。次々にハナ、サカナ、トリなどを折り、いろいろ説明するが本人は終始無言。以後、カウンセラーの訪問を本人が玄関まで出迎えるようになる。スポーツ、テレビ、マンガの話を通してお互いの親密度が増してきたようである。2学期終業式後の訪問面接の際、3学期からは学校で会うことにする。

3学期から登校しはじめる。週1回学校で面接。弟妹のこと、友だちのこと、今感じている不満のことなど話すが、父母のことになると話をそらしたり黙りこんだりする。しかし3学期は1日も休まず登校し事故なしで進級する。ここで学年からの要請で本人との話しあいを一まず終結にする。しかしカウンセラーは、祖父母と父母の溝の埋まらない限り問題は解決していない、という不安を禁ずることができなかった。3年になって4月中旬、万引きのために警察の補導を受ける。5月、学級および学年で金銭が続けてなくなる。彼に疑いがかかり再び学年の厄介者視される。そして担任から、「さっぱり口を開かないので何とか話を聞いてやってくれ」と頼まれ面接を再開する。再開第1回目、「クラスの金がなくなったのはボクに関係ない」「父が入院しそのため送金がとだえた。妹の所へ行きたくなり、みやげが欲しくなってつい手が出た」「友だちがいない。白い目で見て仲間に入れてくれない」などと語り、その後、学級会で本人とクラスの全員が話しあい、いろんなやりとりの後、「ボクにも悪い所があったが、これからは今までの目で見ないでほしい。この前の金のことは本当に知らない」と訴えたそうである。以後、「授業中おとなしくなった」「ノートもとっている」という声が先生方の間からも聞えるようになった。5月～7月の面接では、学級の中が面白くなった、修学旅行の楽しかったこと、友だちもできた、班長になった責任を感じていることなど、細かく話す。夏休み前は、「おじいさんと一緒に仕事に行く。日当が貰えるので弟妹にも何か買ってやれる。朝の早い仕事で苦しいと思うが見ていて下さい」と元気そうであった。8月上旬家庭訪問して祖母に会うと「朝6時半におじいちゃんと一緒に出て行き7時頃帰ります。おじいちゃんも喜んでいます。それに夕食後私の肩をもんでくれるので、一日の疲れも飛んでしまうようです」ということであつた。しかし、両親との関係がまったく改善されていないことに不安を感じたカウンセラーが、それについてふれると、「あの子たち(父母のこと)は子どもとは思っていない。借金で首が回らなくなって家を出たので、自分たちが家屋敷を手放して穴埋めした。ずっといじめられ通して、お金の置いてある部屋には鍵がしてあり、こんな年(70才位)で行商でもしなければ食べてゆけない。これからが思いやられる。向うが謝まってでもくればとも角、こんな話はこれ以上しないで下さい」とニベもなかった。

8月下旬、「すぐ来てくれ」という祖母の電話で訪問。「今日の明け方、近所の店やに侵入して金品を盗んで逃げた。母から連絡あり。何をしていたのかとののしられた」と言う。思いきって両親の家を訪れる決心をし、渋る祖母から住所を聞き出し母に会うと、父は出張中で、「今にして思えば無理をしても自分たちの所に引き取っておくべきでした」と言って、「祖父母があの子を可愛がりすぎてわが儘にしてしまった。毎日々々皮肉ばかり言われ、近所に出てはありもしないことを言われるので、たまったものではありませんでした。弟や妹はチャンと育っているのに、どんな育て方をしてるのでしょうか。おばあさんの所に頭を下げには絶対行きませんよ」ということであつた。ところが2～3日後母から、「又やった。警察から帰る途中逃げてしまった。すぐ来てほしい」という電話をうけ、行くと、「昨夜11時頃又事件を起こし、警察では、留置するのともうかと思うので明日10時に来るように言われ、帰りに逃げられた」と言う。祖母の所へ連絡すると、「ご飯を食べてそちらへ行くと言って出た。『盗んだ分を返せば許してやると警察に言われた。頼れるのはおばあさんだけ』と言うので3万円出してやりました」とのことである。「そんなことではとても子どもを育てる資格はありませんよ」とカウンセラーも腹を立ててしまう。翌日、父が警察に保護願いを出す、以後50日間本人の消息はなかった（この間、他府県の大都市のパチンコ屋などを転々としていたらしい。そして家の近くの街の店で、常雇いにするから戸籍謄本を出すようにいわれ、逃げ出した所を警察に補導されることになる）。

一方、カウンセラーは、祖父母、父母の家を何回か往復し、「本人の身になって」「帰ってきた時みんなて迎えてやれるように」と、10月初旬、祖父母と両親が話しあう機会を作ることになった。重苦しい話しあいにカウンセラーが立ち会い、その後祖父母と父母だけでもう一度話しあった結果、10月中旬父から、「今までのことを水に流して、自分たちがおじいさんの所へ行くことにし、荷物ももう運びこみました。私も毎日勤めの帰りに探しているのですが、本人の所在はまだ判りません。今までの報いですね」という電話があつた。そして下旬、父からの「警察から引き取りにこいと連絡があり、今一緒に帰ったところです」という電話に急いで駆けつけると、「何を尋ねても物を言わないので行ってやって下さい」と頼まれる。部屋に入って目が会ったとたん、カウンセラーは、「バカ。貴様をぶっ飛ばしてやりたい思いだ」と大声でどなる。子どもは一瞬カウンセラーを睨みつけ、ついで飛びかかってくる。それを正面からうけとめてもう一度、「どれだけ心配かければ気がすむのだ」とどなる。しばらく沈黙の続いた後、「オヤジがボクを探していたというのも、世間体を考えてのことだろう」と、ボツリボツリと話し始める。

11月から登校し週1回の話しあい続ける。「オヤジとも少しづつ話ができるようになった。学級みんながいつもと変わらない。班長をまだボクに残しておいてくれた」などと言うようになった。学校では、教育の限界という声もあったが、今一度チャンスを与えようという意見が多数をしめ、裁判所は学校預けという結論を出した。裁判の後、少年はカウンセラーの手を

握って、「ありがとう。もうだまさない。だますと又どなられるから」と涙を流す。その後無欠席で無事卒業し、現在小企業ながら元気でまじめに働いている。

4. 考 察

思春期が自立の時期であり、だからこそ無力感に捉われやすいことはすでにのべた。この時期の子どもたちは、出立に当って何らかの形で世界とのつながりを再確認しなければならない。それは多くの場合、親とのかかわりをもう一ぺん見直すという形をとる。そしてそのつながりを確かめることのできない時、子どもたちは幼児期にまで遡って、自らの親子関係を徹底的に再体験しなければならぬ場合がある。ただ、それは本来内なる親としての無意識とのつながりを確かめるためのものであるから、必ずしも現実の親子関係そのものを反映しているとはいえないのである。だから、親に代るべき家とのつながり、一族とのつながり、地域とのつながりなどが確信できれば、いわゆる望ましい親子関係に恵まれなかったことが、致命的な外傷にならないですむ。

又、すべての親は、何らかの意味で子どもの欲求を妨げるから、子どもたちの心に必然的に生ずる悪しき親、の投影(クライン 1975)を免れることはできない。又、このケースのように現実の親子関係に顕著な欠落のある場合、一切の問題がそこに収斂されてしまい、それさえ片づけばすべて解決するようにみえることもある。実際には問題は内的なものなのだから、そこから真のとり組みが始まることになる。またすでにのべたように、未分化な世界との一体感は思春期には多かれ少なかれ崩れるし、かつ試行錯誤的な自己主張の試みが、反権威・反社会的な形で行動化されることもすでにのべた通りである。だから、現われた行動の激しさのわりに、問題そのものはそれ程深刻と思えない場合もある。しかし、子どもの無力感の大きい時、それだけ「より大いなるもの」とのつながりを求める気持は強く、そのつながりをどうしても現実の親子関係に見出そうとすれば、いきおい相当深いレベルまで入りこんだ体験が必要なのではないか。

そこでこの少年についていえば、上述の意味で親子関係を確かめようとして、この少年のまず気づかねばならなかったことは、自分が“捨てられている”ということであった。いろんな事情はあったにせよ、弟妹二人は両親と一緒に過しているのに、自分だけとり残されて祖父母と暮らさなければならぬ。しかも祖父母はこの子どもの両親のことを、「あの人たちは他人だから」と言っている。だから祖父母との関係を通して、両親とつながることは不可能である。又、子どもたちは親とのつながりを通して世界とのつながりを求めているのだから——この世界が子どもの無意識の世界の投影をうけていることはすでにのべた——親自身が世界とつながっていなければならない。しかしこの祖父母は、彼ら自身がこの子の親から捨てられて世界とのつながりを断たれている。だから、祖父母とのつながりをいくら確かめてみても、かえって孤立感や無力感がつのるだけで、この子の不安が癒されるとは考えにくい。むしろカウ

ンセラーが訪問した時に示されたように、この祖父母は養子に対する怨恨を、そのまま学校や世間に投射している可能性がある。こうした祖父母の態度は、かなりの程度この子どもにとり入れられて、世界との断絶感のごときものの形成されていることを考えねばならない。何れにせよ、この祖父母に両親の代役を期待するのは無理な話なのである。

だから子どもは、何としても両親とのつながりを見つけなければならなくなる。果して親は祖父母もろ共本当に自分を捨てたのであろうか。若干の仕送りはあったらいいから、この子との関係がすっかり断ち切られていたわけではない。こういう場合親の本音を知る一つの方法は、自分自身を危機的状況にさらしそこで親がどう反応するかを見ることである。それが反社会的な行動化として現われたものが非行だといえる。これは、一つには、十分配慮してくれぬ社会に対する怒りの表明であり、外部に対する攻撃の形をとるが同時に自分自身への攻撃でもある。その意味では幼児的な一種の拗ねであるが、土居（1974）の指摘をまっまでもなく、拗ねとは甘えの変形に他ならない。だから、うわべの怒りとは裏腹に、心の底にはひそかなつながりが感じられており、それを一そう明白な形で確かめたいわけである。

一般に、思春期の子どもたちにとって、内的な心的プロセスがそのまま外的世界に投射される傾向が大きい。それは自我のめざめが、内界への開け以上に外界への開けとして経験されるからであろう。だから現実には、しばしば客観的にそうであるのとは違った風に経験されているけれども、それにもかかわらず、この時期の若者たちが現実とうまくかかわっていることは、本人が意識していると否とを問わず、内的プロセスのスムーズな進行を反映していることが多い。つまり、現実適応が内的状況をスムーズにする、という意味がある。人生の前半期におけるペルソナ作りの重要である（Jung 1971）ゆえんである。

いずれにしろ、この子どもの甘えは、まず学校場面に投射されたようである。たとえば級友に対する乱暴は、お前たちには親がいるのにオレにはいない、という弟妹への嫉妬のからんでいた可能性がある。先生に注意されると素直に謝まるが、少し強く叱責されると学校を休んでしまうというのも、教師―親の権威に一応迎合するのだが、一たん拒否的に扱われるとすぐさま前述の拗ねが現われ、そのため底にある甘えの感情は見逃され、反抗的態度にのみ目をつけられていたきらいがある。盗みにしても、求めて得られぬ周囲の配慮を自ら手に入れようとする試みであったかもしれない。だからこの場合、この子どもの行動を学校場面に対する反応としてのみ捉えることはできないので、教師の叱り方がきつすぎたとか長すぎたとかいうことは、ほとんど問題にならないのである。両親と同居していた時のことがはっきり判らないので、何ともいえない点があるけれども、この子どもの盗みや暴力行為は本来家族に向けられるべきものが学校場面に投影されているのだから、おそらく本人にもわけの判らぬものであった、と思われる。

祖父母たちも又、実際にはどうしてよいか途方にくれながら、問題の解決は学校の責任ということで強がってみせ、学校ないしカウンセラーに、出ていった養子に対する恨みつらみをぶつけている。その結果子どもからすれば、二重に家族関係を学校に投射することになっている。

そしてカウンセラーは、彼らとのかかわりを断つことのない、力強い父親役を見事に果しているといつてよい。この家全体が、カウンセラーとのかかわりを通して世界とのつながりを回復し、子どもの心もやや開かれてくるのである。もしも子どもの傷手が軽いものであれば、この程度のかかわりで立ち直ることができたかもしれない。

なお本論では、カウンセリングのプロセスそのものを論ずるつもりはないので詳しくはのべないが、こういうケースでしばしば「試し」の行われることは指摘しておきたい。つまり、このカウンセラーの家族訪問は9月から始まるのであるが、子どもに会えるようになるには、まず祖父母の試しにパスしなければならなかった。このカウンセラーが、どれだけ本気で自分たちのことを考えてくれているか、又、どの程度あてにしてよいだけの力を備えているのか、が測られるのである。拗ねの程度が大きい程この試しは執拗であり、かつ、一旦関係がついてからも、ちょっとしたことで容易に崩れてしまう。だから、ある程度強引と思われるカウンセラーの根気のよい努力が必要である。

このケースの場合、カウンセラーが直接子どもの部屋に入ろうとしても、祖父母は止めなかったが、試しにパスする以前にこれをやっておれば、ていよく追い返されていたかもしれない。もちろん、その間子どもも又カウンセラーと祖父母の応待を窺っているわけで、子どもの部屋に入れたこと自体、物は言わずとも、この子の試しにもなればパスしていたといつてよいと思う。そして一旦関係がつくと、子どもはカウンセラーの訪問をむしろ待ち望むようになる。こういう子どもの、うわべとは逆の人恋しさがよく表われている。

こうしてカウンセラーとのかかわりを持てたことは、少なくとも学校場面に対する親コンプレックスを解消させるのに役立った。それが登校を再開できた第1の理由である。しかし、もともとこの子どもの狙いは、両親の本心を確かめることであった。だから、これで一件が落ち着いたのでは、問題は一時的な学校不適應ということでおしまいになる。この間事情を知ってか知らずか、親の動いた気配はまったくない。幸か不幸かこの子どもの欠落感——つまり内面的な問題——は、カウンセラーとつながりがつくことで癒される程に浅いものではなかった。別ない方をすれば、よほどのことがない限りカウンセラーが親代りを勤めることは、表層的な場合を除いてはありえない、ということである。だからこの子どもは、何としても親を引き出さねばならない。又、これだけ体を張った努力に対しても乗り出してこない、親に対する新たな怒りもあったはずである。それとおそらく、うわべの小康状態に欺かれて、学校側の態度が再びよそよそしくなり——カウンセラーの不安にもかかわらず、学年の要請でカウンセリングが一時うち切られている——、それが、克服したはずの親コンプレックスの学校への投射をぶり返させた可能性がある。

いずれにしてもこの子どもは、もっと大きい事件をひき起こさなければならなくなる。それが、父からの送金のとだえた時に起こった万引きということは、やはり与えられない愛情を自ら奪いとろうとする行為だ、という前述の仮説を裏づけているのかもしれない。

しかし第2回目のカウンセリングが始まってからの子どもの様子は、意外に順調のようにみえる。これは、あらためて学級内に受け入れられ、そこで然るべき位置づけが可能になったからであろう。カウンセラーの努力を媒介としてではあるが、周りの世界が少年をうけ入れる方向に進んでおり、少年の心も次第に外側の世界に開かれつつあったわけである。そして普通ならば、この段階で何とか立ち直る子どもが少なくないのである。事実、この子ども自身何とかこの状況で立ち直ろうとした形跡がある。たとえば夏休み祖父と一緒にアルバイトに精を出し、疲れているにもかかわらず祖母の肩をもむなどのことである。

いずれにしろ、この段階ですべてがおさまれば、問題は再び一時的な不適応ということですから、状況は元のままである。親は依然として動いていない。しかし少年の求めているのは、カウンセラーも感じているように、家庭状況の根本的な変革である。彼の心は、少なくともそれと対応する程に深いレベルの世界とのつながりを必要としている。くり返しのべたように、それは無意識ないしより大いなるものとのつながりを、親との関係を通して再体験しようとする試みである。だから、よほど深い関係をカウンセラーとの間にもたない限り、ある程度の acting out は避けられない。その上、思春期の強い自我意識には、その主体性を自由奔放な行動化を通して確かめようとする傾向がある。したがって両者が結びつくと、一見わけの判らない行動化のくり返されることがある。そういう場合の子どもたちの姿からは、むしろ行動化を楽しんでいる様子さえうかがえることが多い。しかしそういう場合でも子どもたちは、親とのつながりを求めるひそかな望みを失ってはいない。

たとえばある高校1年の女の子は、何回目かの無断外泊で、必死に探し回る母親に深夜ディスコで発見されたが、「友だちの前で 恥をかかされた」と凄い剣幕で 食ってかかったあげく逃げてしまい、母親をすっかりしよげさせてしまった。しかし後でこの子どもの話によると、「実はあの時凄く嬉しかった。友だちの手前偉そうなことを言ったが、よくもこんな所にいるのを探し当ててくれた。お母さんは本気で私のことを考えてくれていると思った」ということなのである。家出して喫茶店で働いていた高3の男の子は、「子どもは親を切ることができても、親は子どもを切れないものだ」という父親の述懐を聞いて、家に戻る気になったという。いわばそのような親の態度なりことばを引き出すために、子どもは行動化に走っていた、といえなくもない。

この少年は、一見すっかり立ち直ったかにみえる夏休み終り頃、近所の商店に夜中押し入って捕まった。その際の祖父母の応待から、カウンセラーは彼らに見切りをつけて両親に会う決心をする。今までは、家庭内のことに口出ししてくれるな、という祖父母のことばに遠慮していたのであるが、そんなことに構っておれなくなったわけである。しかしこれは又、日常の愛着心とは別の、祖父母に対する、と同時に両親に対するこの子の気持を代弁させられていたのかもしれない、その結果、少年が行方不明になった時、保護願を出したのは父親であった。この時期に、子どもが非行集団に誘いこまれなかったのは幸運である。つながりを求める気持が、

相手構わず仲間を求めさせるし、ある種の非行、たとえばシンナー吸飲は、かつての未分化な世界との一体感への憧れ、いわゆる胎内復帰願望に通ずる所があるからである。しかし、少年の態度に、非行グループをうけつけぬ厳しさのあった可能性も大きく、それだけこの子どもの潜在力が大きかった、といえるかもしれない。

もちろんこの家出には、少年の自立を願う気持ちも含まれていたはずである。さらに、すでにのべたような、今まで自分を見捨てていた両親や社会に対する怨恨なり復讐の意味がなかったとはいえない。その場合考えねばならないことは、こうした行為がつねに、一方で自己破壊的な面をもちながら、他方建設的な傾向をも多分に含んでいることである。この子の場合家出の目的は、基本的により大いなるものとのつながりの確認であり、それはそれ自体積極的な意味をもつ。しかし怨恨なり復讐心も、もともとはその「大いなるもの」に向けられたものであるから、それが現実の親なり社会なりに投射されると、どうにもならないという感じが先になってともすれば否定的な傾向が大きくなりやすいのである。しかもそれは、もともと内的な心的レベルの問題であるから、外的な周囲からの配慮をうけつけにくい所がある。だからわれわれにできることは、ひたすら子どもとのつながりを断ち切ることなく、子どもがその内的課題を自ら処理するのを待つよりないことが多い。

したがって少年が行方不明になった時、カウンセラーのとった処置は極めて適切なものであった。経験的にいって、最初の家出はほとんどの場合戻ってくる、と考えてよい。家出には多かれ少なかれ試しの意味があり、逆説的にいえば、それによって親に接近するきっかけを掴もうとする狙いがある。だから家出の問題は、最初に戻ってきた時どう対処するかが勝負なのである。ここで処置を誤ると、再び帰ってくる可能性は大幅に失われる。大抵の場合、安心からくる腹立ちが先に立ってオーバーに叱りつけてしまったり、又飛び出されるのではないかと気を使いすぎて失敗してしまう。こういう時、自分の気持ちを素直に出すことができればよいのだが、これはいう程に簡単なことではない。つまり、安心も腹立ちも両方本音なのであるが、それをそのままうまく伝えられた時は、大抵うまくゆくものである。

たとえばこのカウンセラーは、最後に子どもが帰ってきた時、「バカ、ぶっ飛ばしてやりた」とどなりつけ、それから飛びついてきた子どもと抱きあっている。誠意をつくして走り回り、なおかつ裏切られて腹の立たないのはおかしいけれども、やはり帰ってきてくれた喜びは大きいのである。これをよかったよかっただけでは、怒りの気持ちが出ていないし、バカヤローだけでは嬉しさが伝わらない。子どもの側からみても、当然怒るべき時に怒らないカウンセラーは不自然で人間味を感じにくい。ちょうど腹の立っている分だけ怒り、ちょうど嬉しく思っている分だけ喜ぶということは、企らんでできることではないけれども、実際の場面では大切なことなので、ちょっとつけ加えておく。

いずれにしろ両親に十分な力があれば、ここでカウンセラーの出る幕はない。しかしそれならば、子どもがこういう状況に落ちこむ必要もなかったはずである。だからカウンセラーは、

少年が帰った時の受け入れ体制のことを考える以上、家庭内の問題に立ち入らざるをえない。しかし逆に考えると、この親たちは、こじれた家族関係にカウンセラーを介入させることによって、難しい問題を巧みに処理したのだ、といえるかもしれない。うがった見方をすれば、少年の行動自体、もともと祖父母なり両親の無意識のうちに期待していることを実現するためのものであったかもしれない。つまり、何か起こらないと不自然な家族関係がおさまらない、という漠然とした感じに少年が動かされ、それが強力なカウンセラーの介入を招き、今までこの家族に欠けていた力が補われた、ということである。しかしそれは、まかり間違うと子どもがつぶれてしまうような試みである。もちろん、子ども自身そこまで意識的に計算して家出したわけではない。子どもがもう少し強ければ、必ずしもこういう形で親子関係を再確認しなくても、思春期の危機をのり切ることができたであろうし、もう少し弱ければ、非社会的な症状を出すか、第1回目の家出から帰ってこれなかったかもしれない（1回目にしては家出の期間が長すぎる）。だから、ギリギリの所で事件が展開しているのであるが、その要所要所で知らぬ間にカウンセラーが一役買わされているわけである。

たとえば、「私が彼だったら」という家族会議でのカウンセラーの発言は、カウンセラーが子どもの代理を勤めさせられていることを示している。はじめカウンセラーは、子どもにとっては父親代り、祖父母にとっては養子代りの役をひきうけさせられた。両親に対しては一種のスーパーエゴの役割りをとられたのかもしれない。それも、実際の人物より少しづつ力強い存在としてである。それが子どもと親とを結びつける、つまり、より基本的なレベルでの世界とのつながりを可能にしたわけである。

いずれにしろ、こうして受け入れ態勢の整った所に子どもは帰ってくる。そして子どもは、「オヤジがボクを探していたのは世間体のため」と言いながら、自分の関心がどこにあったのかをまずのべている。子どもと親との結びつきは、確かに何らかの学習の結果といえる（スラッキン 1976）かもしれない。しかし、実の親と思っていたのがそうでないと判った途端、今までスムーズであった親子関係が急にぎこちなくなるように、われわれは様々な観念によって条件づけられている。だからこそ親という観念が、しばしばより大きい世界を代表しうるのである。そして親とのつながりが、現実の世界および無意識の世界とのつながりを促すのである。もちろんそれだけで一切の問題が解決するわけではない。この子どもについていえば、やがて現実の親からの親離れが次の課題となろう。しかし、内的な問題のこのような外的な解決が、とくに思春期以後は重要な意味をもっている。すでにのべたように、子どもが意識すると否とを問わず、外的状況の整理が内的状況の整理を意味していることが多いからである。だから中年になって、あらためて内的な問題に直面するまでは、少なくとも内面的にはさしたる問題もなく過せるのではないか。

要 約

思春期の非行を考える場合、従来いわれている環境的要因の重要性を認めながら、同時にそれを、内的な発達のプロセスにおける、ある程度避けることのできぬ必然的な課題として捉えようと試みた。つまり、内的なつまづきが外界に投射されて、それが反社会的な行動化として非行につながるのではないか、ということである。そうした仮説を具体的に検討するために、一つのケースをとりあげて若干の考察を試みた。

（付記）このケースは、岡山市丸の内中学校砂田和孝氏の提出されたものを筆者がスーパーヴァイズしたものである。記述に際しては少年のプライバシーを守るために十分な配慮を払った。なお、発表については砂田氏を通して本人の了解を得ることができた。少年と砂田氏に心から感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 土居建郎 1974 甘えの構造 弘文堂
遠藤辰雄 1978 非行心理学 朝倉書店
von Franz, M.-L. 1972 Creation myths Spring publications.
von Franz, M.-L. 1974 Shadow and evil in fairy tales Spring publications.
ヒーリー, W. ブロンナー, A. F. (樋口幸吉訳) 1974 少年非行 みすず書房
平井信義 1978 登校拒否児 新曜社
平尾 靖 1979 非行心理の探究 大成出版
岩田慶治 1979 カミの人類学 講談社
Jung, C. G. 1971 Psychological types CW 6 Princeton university press.
笠原 嘉 1977 青年期 中央公論社
クライン, M. (松本善男訳) 1975 羨望と感謝 みすず書房
小出浩之 1978 分裂症からみた思春期 中井, 山中(編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社 63-88
黒川昭登 1978 非行をどのように治すか 誠信書房
Neumann, E. 1973 The origins and history of consciousness Princeton university press.
西村洲衛男 1978 思春期の心理 中井, 山中(編) 思春期の精神病理と治療 255~286
小小木啓吾 1979 対象喪失 中央公論社
シュプランガー, E. (原田茂訳) 1977 青年の心理 協同出版
スラッキン, W. (佐藤俊昭訳) 1976 人間と動物の初期行動 誠信書房
Suttenfield, V. 1954 School phobia: A study of five cases Am. J. Orthopsychiat.
高橋 巖 1977 ヨーロッパの闇と光 イザラ書房
氏原 寛 1978 心臓神経症と思われる患者との面接例 大阪外大学報第40号 119~134
氏原 寛 1979 思春期心性について(1)——登校拒否について—— 大阪外大学報46号 121~134
我妻 洋(編) 1979 非行少年の事例研究 誠信書房
Waldfoegel, S. 1957 Family relations in the development of school poobia Am. J. Orthopsychiat.